

## 西周時代の骨角製の鏝の一種について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高濱, 秀, 高浜, 秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/27282">http://hdl.handle.net/2297/27282</a>

# 西周時代の骨角製の鑣の一種について

高濱 秀

1

中国の馬文化は商代後期から始まる。河南省安陽殷墟からは車馬坑が発見されており、馬をつないだ車が多く出土している。この時期に発見される馬具には、ほぼ方形を呈する鑣（銜留・くつわ鏡板）がある。鑣とセットになるべき銜は多くの場合発見されない。しかし殷墟では8の字形を2つ組み合わせた形の青銅製銜が現れ、同時期の西安老牛坡では両端がループ状になった棒状の青銅製銜が、馬の口に装着された状態で発見されている（劉士莪編著 2001, 図二三六, 図二五三-1, 2）。殷墟西区 216 号墓では8の字形を組み合わせた銜と方形の鑣がセットとして出土した（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1979, 図版一六-2）。また1981年発掘の車馬坑でも、一輛の車に2頭の馬が付けられた状態で発見されたが、2頭の馬の口中に、それぞれ8の字形を鎖状に組み合わせた長さ14cmの銜が発見され、口の両側からは方形の鑣が、合わせて4点出土した（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1984, pp.505-509, 図版三）。

このような8字形を組み合わせた銜、棒状の銜、そして方形の鑣は、西周代に受け継がれ、とくに8字形を組み合わせた銜は、その後の中国の銜の原型になった。また西周時代からは、幾つかの新しい型式の鑣が現れ、金属製銜の存在自体も、だんだん一般化していく。

西周時代に新しく現れた鑣の一つの型式が、ここで問題にする骨角製の角形の鑣である。細長い角の形を呈し、3つの孔が開けられるが、中央の孔と両側の孔とは互いに90度異なった方向（面）に開いている。材質は鹿角と特定されているものもあるが、単に骨角製と記述されているものが多い。

この型式の鑣は、以前からヨーロッパでも知られていた。1953年にA. モジョリチは、中央ヨーロッパ、カルパチア平原発見の鑣について論文を著したが、そこではこの型式の鑣がハルシュタット時代のものとし

て扱われている（Mozsolics 1953）。またK. F. スミルノフは1961年に「ヴォルガ・ウラル草原地帯の古代遊牧民に関する考古学資料」と題して、ユーラシア草原地帯に最初に現れた馬具について述べた（Smirnov 1961）。この初期遊牧民以前の馬具に関する基礎的な論文の中で、この型式に属するポストニコフ集落址の鑣は第IV型式として挙げられている。

1979年に、H.-G. ヒュッテルはザバイカリエのタブハル出土の鑣および北京昌平白浮西周墓出土の鑣をヨーロッパの鑣と比較して、中国に与えた西方の馬文化の影響と考えた。黒海周辺の幾つかの民族が前9～8世紀頃に中国近くまで移動したという、ハイネ＝ゲルデルンの唱えた「ポントゥスからの民族移動」（Heine-Geldern 1951）との関係を否定し、直接的にはカラスク文化と中国との関係に起因するものと考えている。

この型式の鑣は、現在、中国で発見例が増えてきたが、北方・西方ではザバイカリエ、ミヌシンスク盆地、西シベリア、ウラル地方、中央アジア、ウクライナ、そして中央・西ヨーロッパにまで及ぶ極めて広い地域に分布している。全体としてその数はそれほど多くはないが、当時の文化の動きを考える上に重要であろう。本稿では、まずこの型式の鑣の分布を確認し、それが投げかける問題について考えてみたい。

2

中国

## ①北京琉璃河墓地

この種の鑣が7点発見されている。6点はIM105号墓から出土したもので（図1）（北京市文物研究所 1995, p.31, 図二二, p.239, 図一四六-1, 図版一〇七-5）、鹿角製で一端は平たく一端は尖り、断面方形に作られ、1面に2つの円形孔、側面にも1つの円形孔があるという。これらの鑣はIM105号墓の頭箱中に入れられていた。ここからは角製鑣のほかは青

銅製の武器と車馬具、8点の陶器、貝などが出土した。銜は出土していない。また青銅製の鑣は4点出土している。墓は西周前期と考えられている。

琉璃河出土のもう1点はIM53号墓に付属する車馬坑の埋土の中から出土したものである(図2)(北京市文物研究所 1995, p.30, 図二〇, p.239, 図版一〇七-6)。形は前述のものと同じであるが、一端は破損し、孔には明らかに磨損した痕跡があり、表面に光沢があるという。この墓も西周前期と考えられるもので、車馬坑からは6頭の馬と殉葬された人の骨が発見され、馬具と車の青銅製部品が発見されているが、車箱、車輪、轆など、車そのものは発見されていない。

#### ②北京昌平白浮

ここで発見された西周時代の墓葬は、北方系の青銅器が出土したことでよく知られている。ここでは3号墓から4点の角製鑣が出土した(図3)(北京市文物管理处 1976, 図一八-4)。鹿角製で方孔が3つ開く。長さは9~11cmである。この墓からは、8字形を2つ組み合わせた形の銜が2点出土して、鑣も、角製のほかに青銅製のものが8点出土した。2号墓からは、銜が4点出土しているが、鑣は発見されていない。

#### ③山西省天馬曲村

6130号墓から、4点出土している。湾曲した形で、1点は長さ14.1cmである(図4, 5)(北京大学考古学系商周組等 2000, 図六五五-9, 7)。この墓では青銅製の鼎、簋、甗が1点ずつ副葬され、ほかに車馬具も発見されている。青銅製の鑣も8点出土した。

天馬曲村の西周墓の分類では、この墓は、西周前期の幾らか晩い時期のグループに含まれている。前10世紀のなかに入ると考えてよいであろう。

#### ④河南省洛陽北窯

西周前期の6号墓から、骨製鑣が出土している(図6)(洛陽市文物工作隊 1999, 図八八-1, 図版六〇-3)。僅かに湾曲した方柱状で、中央に円形の孔が一つ、その上下に方向の異なる2つの円孔があく。長12.3cm、幅1.6cm、厚1.3cmである。6号墓はすでに盗掘されていたが、高50.3cmの蓋付きの見事な方壺や壺の蓋、ヒ2点が発見された。壺蓋には「師」の銘文があり、西周時代の他の銅器の銘文にも見える師氏と関連付けられている。鑣は盗掘による攪乱

土の中から発見された。

なおやはり西周前期の310号墓から、青銅製ではあるが、角形とも言える形の鑣が3点出土している。

#### ⑤陝西省長安張家坡

ここの西周時代墓地では、角鑣が56点出土しており、2型式に分けられている。そのうち26点は1つの型式に分類され、鹿角製で孔が異なった面に1つずつ開くものである。残りの30点が、ここで問題にしている型式の鑣ということになる。しかし保存の良いものはわずか2点であった。1点は165号墓の棺内から出土したものである(図7)(中国社会科学院考古研究所編著 1999, 図247-3, 図版193-3)。ほぼ中央に方孔が開けられ、その上下に2つの方孔が異なった面に開けられる。長13.3cmである。もう1点は284号墓から出たもので、形はほぼ同じであるが、孔は全て円孔で、長10.2cmである(図8)(同書、図247-2, 図版193-4)。報告書の分期によると、165号墓は西周時代の夷王厲王共和期、284号墓は昭王穆王期に属するという。一応、前10-9世紀と考えられるであろう。

#### ⑥山東濟陽劉台子

ここの西周墓地では、M3の墓壙の上の攪乱土のなかから、長12.6cmの鹿角製の三孔の鑣が発見されている(図9)(德州地区文化局文物組、濟陽県図書館 1985, 図二, 四)。明らかに使用痕があるという。これはM3にほぼ接して漢墓が造られた時に壊された周墓の遺物と推定されている。

#### ⑦内モンゴル自治区赤峰市小黒石溝

92NDXA II M11において、被葬者のまわりから青銅製のくつわ及び銜、鑣、そして骨製の鑣が出土した(内モンゴル自治区文物考古研究所等編著 2009, pp.349-356)。問題の鑣は柱状体を呈し、中央に方形の孔が1つ、両端にやはり方形の孔が2つ、方向を違えて開けられている(図10)(同書、図二八七-8)。長さ11cm、断面の長さは2~2.8cmである。これは銜と組み合わせられて出土したのではなく、元来どのような銜と共に使用されたのか、明らかではない。ただ、両端が鐙形の銜が同じ墓から発見されている。

この墓からは骨製の鑣が5点出土している。この鑣の他に、細長く平たい形で、同一平面上に3つの孔のあるものが3点と、おそらく似た形であったと見られる骨製品の断片が1点ある。ここでは2点

の図を掲げる(図 33、34)(同書, 図二八五-1, 図二八七-6)。そのほか、やはり小型ではあるが同一平面上に3孔のある平たい形の、鑿と似た形の骨製品(「鑽孔骨器」と呼ばれている)が出土している。

⑧遼寧省建平県孤山子郷大拉罕溝

851号墓は、そこの住民が野菜の為の貯蔵庫を掘ろうとして発見したものである。この墓からは遼寧式銅劍1、枕状器1、劍先断片1、銅斧1、銅刀1、双鈕銅鏡、銅鏡2面、鏡形飾1、石斧1、そして角製鑿が3点出土した。骨鑿には2型式あり、1型式は1点で、ここに問題にしているものである(図 11)(李殿福 1991, 図三-10)。鹿角で作られ方形の孔が3つ開けられている。中央の孔は両側の孔とは異なった方向に開けられている。長さ11.6cm、径は2.2、1.3cmである。使用されたため光沢があり、孔の中も磨った跡が顕著であるという。もう一つの型式は、角を2つに割った形を呈するもので、基本的に同じ形をした2点が発見された。孔が同一面に3つ開けられており、その一つは長さ10.6cm、幅2.3cm、厚さ1cmで、中央の孔は円形、両側は方形である(図 35)(李殿福 1991, 図三-9)。これも磨損の跡が顕著である。

⑨吉林双遼后太平墓地

ここでは黒龍江省のいわゆる白金宝文化の土器が多く発見されたが、そのほかこの地の特色を示すと見られる土器も出土した。また夏家店上層文化に見られるような双尾形の飾金具や端部に放射状の沈線のある銅泡なども発見されている。炭素同位元素の年代測定により、この墓地は西周時代から春秋時代後期に至る時期とされている。角鑿は3点出土した。26号墓出土のものは鹿角製の一端の尖った形で、中央の孔および上下の孔いずれも方形を呈し、長17.7cmである。太いほうの端部附近には、中央の孔と同方向に小さな円形の孔が開く(図 12)(吉林省文物考古研究所等 2009, 図一四-4)。26号墓からは、ほかに、直径4cm程の針金を巻いた形の青銅製環、紋様のないボタン形金具、刻紋骨板、骨製紡錘車、角製鏃などが出土している。

⑩内蒙古自治区林西県井溝子

ここでは骨角製の鑿と考えられるものが11点出土した。しかし対をなしているものはない。孔の開け方はいろいろであって、4孔のものもあり、2孔のものもある。なかでは21号墓出土のものが、今問題にし

ている型式に属しているといえるであろう(図 13)(同書, 図五六-16)。中央に方孔が開き、上下の2孔は、1つが円形、1つが方形である。一端は方孔のところで破断しており、現在の長さは14.4cmである。同じ墓からは他に、1点の陶製罐、骨鏃、青銅製耳環断片、トルコ石の珠や管、瑪瑙珠、小型貝製飾などが出土している。この墓地で明らかになった考古学的文化は、暫定的に「井溝子類型」と呼ばれ、年代は春秋時代後期から戦国時代前期、前550～300年と推定されている。

⑪寧夏回族自治区と甘肅省

寧夏固原の楊郎馬莊墓地(寧夏文物考古研究所等 1993, 図二六-9, 図版五-4)、彭堡於家莊(寧夏文物考古研究所 1993, 図版一七-2)、彭堡撒門村(羅豊、韓孔樂 1990, 図九-1, 3)、彭陽交岔郷官台村(羅豊、延世忠 1993, 図一-4)から、同様の鑿が出土している。また最近甘肅省張家川回族自治区馬家塬で発掘された遊牧民の墓地でも発見例がある(2010年、甘肅省博物館に展示)。これらはやはり鑿と考えられるが、すべて寧夏・甘肅に分布する遊牧民文化の遺跡から出土しており、年代も戦国時代である。この地方の遊牧民文化に特有のもので、他の一連の西周時代の鑿とは直接の関連をもたないものと考えたい。これらは以下の考察からは、除外することにする。

ザバイカリエ

角製の鑿が、ザバイカリエの板石墓文化の墓地から2点出土している。1点はソトニコヴォ Sotnikovo 15号墓から出土したもので(図 14)(Dikov 1958, c.92; Tsybiktarov 1998, Рис.70-3)、墓壙の西壁、被葬者の脚の辺りから発見された。もう1点はタブハル Tapkhar 69号墓から発掘されたものである(図 15)(Dikov 1958, Табл. X - 23; Tsybiktarov 1998, Рис.70-4)。共に幾分曲がった方柱形で、中央に隅丸方形の孔が開き、別の面の上下にも孔が開く。A. D. ツビクタロフは板石墓文化を後期青銅器時代にあたる前13～8世紀と、「初期スキタイ時代」にあたる前8～6世紀の2時期に分けたが、これらの鑿は、前者、すなわち後期青銅器時代のものとされている。

ミヌシンスク

ミヌシンスク盆地のカラスク文化の集落址トルガ

ジャク Torgazhak において、骨角製の鑢が 5 点出土している。この集落址は基本的にカラスク文化のカーメンヌイ・ロク期に属すると考えられており、前 10～9 世紀に年代付けられている。5 点の鑢はいずれも 3 孔があったと推定されるが、曲がり具合などに差がある。そのうち 1 点が、中央の孔と両側の 2 孔が別の面に開けられている鑢である (図 16) (Savinov 1996, Рис.3-5)。これは 5 号住居址から発見された。5 号住居址については、放射性炭素同位元素の測定により 954-942 B.C. という年代が出ている。ほかにもミヌシンスク盆地においては、ウスチンカ墓地で同様の鑢の発見例があるらしい。

またエルミターージュ博物館にこの型式の鑢が展示されている (2010 年 5 月)。カラスク文化の後期とされるカーメンヌイ・ロク Kamennyi log I 遺跡において、M.P. グリャズノフが発掘したものである (L. マルサドーフ氏ご教示)。年代は前 11～9 世紀という。

#### 西シベリア

西シベリアの後期青銅器文化であるイルメン文化においても、この種の骨角製鑢が発見されている。エロフカ Elovka 集落址では、3 孔が異なる二面に開けられる鑢 (図 17, 18) (Matyushchenko, Igol'nikova 1969, Рис. 5-7; Chlenova 1994, c .45, Рис.4-10, 11) が出土したが、同じ層位から、3 孔が同じ面に開けられる鑢 (図 38) (Matyushchenko, Igol'nikova 1969, Рис. 5-6, 8; Chlenova 1994, c .45, Рис.4-12, 13) も出土した。またボリショイ・ロク Bol'shoi log 集落址では、2 つの異なった面に 3 つの孔が開けられ、補足的な小孔をもった鑢が (図 19) (Chlenova 1994, c .134, Рис.28-17)、スキタイ時代の逆刺付双翼鏃や、先タガール期あるいは早期タガール期の青銅製鏃と同じ層位から出土しているという。ボリショイ・ロク集落址はエロフカなどよりも少し遅く、青銅器時代から初期鉄器時代の変り目の頃と考えられている。

#### ウラル地方

クイビシェフの近くのポストニコフ Postnikov 峡谷にある集落址から角製の鑢の破片が発見されている (図 20) (Smirnov 1961, Рис.9-3)。下半部に細い長方形の孔が開き、それに対して直角に小孔があつて、そこに骨製の釘状のものが嵌まっている。上の壊

れた部分には、下の孔と直角に別の孔がある。鑢の表面には刻線紋様が微かに認められる。K. F. スミルノフは、上の孔を鑢の中央の孔と推定し、モジョリチ A. Mozsolic の論文を引用して、ハンガリーのハルシュタット文化の鑢をその類例として挙げている。

#### 中央アジア、フェルガナ

チュースト文化はフェルガナ盆地東部に見出される後期青銅器時代の文化である。その代表的な遺跡であるチュースト Chust 遺跡とダリヴェルジン Dal'verzin 遺跡において、この種の角製の鑢が発見されている。

チュースト集落址の 1955 年の発掘では骨角製品が多量に発見されたが、そのなかに孔をあけた管状のものがあった。報告した V. I. スプリシェフスキーは、フルートのような楽器かと考えたが (Sprishevskii 1958, c .92, Рис.27)、A. I. テレノシュキンは後にそれらを調査して、鑢だと述べている (図 21, 22) (Terenzhkin 1971, c .77, Рис.4-6, 7)。3 孔が同じ面にあるものとともに、異なる二つの面に孔の開けられたものもあるという。テレノシュキンは、後者は中央・東ヨーロッパの考古学では後期青銅器時代とされるが、中央アジアとカザフスタンではさらに後まで、サカ時代にまで使用され続けたと考えた。

ダリヴェルジン集落址で出土したのは、3 孔で、中央の孔は両側の孔と直角に開けられており、残長 8.3 cm ほどの破片である (図 23) (Zadneprovskii 1962, c .35, рис.15)。なおダリヴェルジンからは、同じ方向の 3 孔をもつ青銅製の鑢を鑄造するための石製鑄型も発見されている (Zadneprovskii 1962, Табл. X X -3)。

スプリシェフスキーは、チュースト文化の年代を前 2 千年紀後半と考えたが、ザドネプロフスキーは、アナウ IV やシアルク B と比較し、放射性炭素年代も考慮して、ダリヴェルジン集落址の年代を、前 2 千年紀末から前 1 千年紀最初の 3 分の 1 と推定した。

#### ウクライナ

スボトフスコエ・ゴロディシチェ Subbotovskoe gorodishche は、ドニエプル川右岸のチャスミン川流域にある先スキタイ時代の遺跡である。ここから出土した鑢は、中央の孔のところで割れて一端が欠けているが、チェルノレス文化第 2 期のものとされている (図 24) (Terenzhkin 1961, Рис.67-6)。

またスポトヴォの発掘の際、ボグダン・フメリニツキーの屋敷跡において、この種の鑢が1点発見されている(図25)(Terenzhkin 1976, Рис.85-5)。これは鹿角で作られており、ほかに後期青銅器時代の遺物は伴っていなかったらしい。テレノシュキンは、チェルノレス文化の初めのころのものと推定している(op. cit., c.156-157)。

ウクライナのキーロヴォグラード州、ペトロヴォの、イングレッツ川右岸のチェチェリエフカ Chechelievka 村において、1981年春に2基の古墳が発掘されたが、その2号墳8号墓で、この形式の鑢が出土している。この墓では人骨と、それに伴って金・銀・銅の合金でできた耳飾り、ヴォルヴォルカと呼ばれる銅製の円錐形製品、そして骨製の鑢が2点発見された(図26)(Bokii and Gorbunov 1961, Рис.2-3, 4)。鑢は両端が切り取られた形で、長さは4.6cmと5.1cmである。他のこの形式の鑢よりかなり小型である。ともに、3孔のうち中央の孔が両側の孔とは90度異なった方向に開けられている。耳飾りは、黒海北岸でヴィソカヤ・モギーラなど数基の先スキタイ期の墓において発見例があり、またヴォルヴォルカは北カフカスのコバン文化に類例が知られている。鑢を含むこれらの副葬品や葬送儀礼の分析から、報告者はこの墓を前9世紀後半よりも遅くはない時期と考えている。

最近 S. B. ヴァリチャクは、東ヨーロッパ南部の前1千年紀前葉の馬具について述べた著作を刊行したが、その中で彼は、この種の鑢をスポトヴォ I 型式と呼んでいる(Val'chak 2009, c.56, Табл.2, Рис.43)。上記3例のほか、ゴルデエフカ Gordeevka 5号墳出土品と(図27)(op. cit., Рис.43-1)、クリミアのチュユンチャ Chuyuncha 集落址出土品(図28)(op. cit., Рис.43-8)が挙げられ、他に北カフカス、北オセチヤのズメイスコエ集落址出土例が示されている。この形式の鑢の年代は、後期青銅器時代の末、前2千年紀末から前9世紀のものと考えられている。

#### 北カフカス

北オセチヤのズメイスコエ Zmeiskoe 集落址から鑢の破片と考えられる骨器片が出土している(図29)(Krupnov 1960, Табл.X III -1)。この集落址はコバン文化に属するようであるが、初期スキタイと共通するものや、また先スキタイ期に特徴的な紋様を持つ土器

も出土しているようである (op. cit., cc.148-150)。

#### 中央・西ヨーロッパ

ブルガリアの南東端、黒海西岸に近いアセノヴェツ Asenovets 集落址でも、1例の出土が知られている(図30)(Melyukova 1979, Рис.4-1)。この集落址はこの地域でプシェニチェヴォ型式と呼ばれる遺跡群に属しており、メリューコヴァは、モジョリチの研究を引用して、プシェニチェヴォ・グループの年代を前12世紀末から9世紀の末と考えている。

ヒュッテルによると、この形式の鑢はヨーロッパで30点ほど発見されている(Hüttel 1981, S.117-121, Tafel 13-16, Nos.135-164)。ハンガリーから2箇所6点、チェコのモラヴィアから1点、デンマークのユトランド半島北東端から1点、ドイツで7箇所8点、これは1点がベルリンのほかは、バイエルンなどの南ドイツである。そしてオーストリアが1点、スイスが7箇所10点、イングランド北東部1箇所3点である。スイスの発見地の名をとって、メーリゲン Mörigen 型式と名づけられている。発見が最も多いのは、スイスとそれに接するオーストリアと南ドイツを合わせた地域といえよう。ここでは、ハンガリーのシャークヘジ Saghegy (図31)(Hüttel 1981, No.164)、スイスのメーリゲン(図32)(op. cit., No.142)、そしてイングランドのヘザリー・バーン・ケイヴ Heathery Burn Cave 出土品(図33)(op. cit., No.135)の図を引用しておく。

ヒュッテルはこの型式をイングランド出土例を根拠として前8世紀以前、全体としてウルネンフェルダー文化の後期—末期のものと考えている。ハンガリーのシャークヘジ出土例を中では古いものと考え、起源は中央ヨーロッパ東部にあると考えている。

#### 3

これらの鑢は、大体として、互いに関連を持って分布するものと認めてよいであろう。きわめて断片的な資料もあり、ここに挙げた例が全て鑢であったかどうか、幾分疑いも残るが、その分布はほぼ連続している。吉林双遼后太平出土の鑢には、太いほうの端部に開く孔に直交する形で、小さな孔が開けられている。端部の孔に直交するこのような小孔は、西シベリアのポリショイ・ロクヤ、ウラルのポストニコフ出土の鑢にも

見られる。スミルノフは、孔に通した革紐を留めるためのピンを通したと考えた。またヨーロッパでも、例えばヘザリー・バーン・ケイヴ出土例には両端に孔と直交した小孔がある。このような細部の一致は、これらの鑣が全体として関連することを裏付けている。

ユーラシア草原地帯やヨーロッパでは、この型式の鑣は、後期青銅器時代の末のものとして知られている。あるいは初期遊牧民文化の時代の初期にも及ぶという説もある。それが中国でもほぼ同じ時期に使用されていたのである。

中国で出土したうち、6か所は西周時代の墓地であり、他に夏家店上層文化の内蒙古小黑石溝墓地、遼寧式銅剣を出土した遼寧建平孤山子大拉罕溝の墓、白金宝文化と夏家店上層文化の混じった吉林双遼后太平墓地、そして「井溝子類型」とされる井溝子墓地がある。

西周時代の墓地では、北京琉璃河と洛陽北窯では西周時代前期の墓から、山西天馬曲村では前期の幾分早い時期、北京昌平白浮もおそらく同様の時期、陝西張家坡では西周時代の中期から後期にかけて、そして山東濟陽劉台子は西周時代とあるだけで、詳細にはわからない。どちらかといえば西周時代前半の墓からの出土が多いように思われるが、張家坡では幾分遅めの墓から発見されており、西周時代全体にまたがっているといえよう。これらの遺跡から考えられる年代は、一応、前11世紀後半から前9世紀ということになる。

夏家店上層文化の年代は、南山根101号墓出土の中国青銅器を基準にすると、一応西周時代後期から春秋時代の前期ということになるが、この小黑石溝92NDXA II M11の年代は、まだ明らかではない。南山根102号墓出土のくつわや、天巨泉7301号墓出土の両端に鐙形の環をもつ銜に似た馬具が出土している。南山根101号墓よりも早い可能性がある。

林西井溝子墓地は、報告では、上述の例よりもずっと早い年代である春秋後期から戦国前期と考えられている。井溝子墓地では、夏家店上層文化の灰坑を打破した例が3例あったという。夏家店上層文化の後に来る文化であることは認めてよいであろう。井溝子で発見された青銅器の中には、「変体鳥形飾」「変体鳥首形飾」などがある。これらは、北京・河北省に発見されるいわゆる「燕山類型」の墓地、特に軍都山の玉皇廟墓地出土品などのなかにもしばしば見られるものである（北京市文物研究所 2007, 図版三七二, 三七四～

三七六, 三八八～三九二など）。それを考えると、この「井溝子類型」の年代は、おそらく戦国時代まで下ることはなく、春秋時代の中期頃を中心とすると考えてよいのではないだろうか。夏家店上層文化と文化的な関連が深いことも認められる。ここで発見された鑣も、年代的には他の例より晚いが、夏家店上層文化から受け継いだものと見ることができるであろう。

この種の鑣の編年に関する一つの問題は、同一面に3孔を配置する鑣との関係である。ロシア考古学では一般的に、異なる方向に3孔をもつ鑣は青銅器時代後期、同じ方向に3つの孔の開けられる鑣は初期遊牧民時代の初め頃と理解されている。しかしミヌシンスクのトルガジャク（図34, 35）、西シベリアのエロフカ（図36）、そしてフェルガナのチュースト遺跡では、この型式と、同一平面に3孔をもつ鑣とが、共に発見されている。中国でも、内蒙古の小黑石溝や（図37, 38）遼寧の大拉罕溝において（図39）、両種の鑣が同じ墓から発見された。共通する現象といってよいであろう。チレノヴァはイルメン文化の鑣を論じて、この両型式は同時期のものと考えた。テレノシュキンも、中央アジア・カザフスタンでは、異なる方向に3孔をもつ鑣が、サカ時代にまで続いて用いられたと考えている。

2つの型式の鑣が、同時に用いられていた時期があることは、中国だけでなく、ユーラシア草原地帯の広い地域において、言えることであろう。中国の一部では、西周時代の後も春秋時代の中期頃まで、夏家店上層文化の伝統を受け継ぐ形で、この型式の鑣が続いて使用されていたと考えられる。

#### 4

スキタイ文化などの初期遊牧民文化が、ユーラシア草原地帯に広まる直前、中国の西周時代に相当する時期に、数種類の遺物が広い地域にわたって分布していたことが知られている。ヒュッテルも指摘するように、南シベリアのカラスク文化との関連が、まず問題になるであろう。しかし現在では、この文化あるいはこの時期の遺物が、単に南シベリアと中国というだけでなく、黒海沿岸まで広く分布していることが知られている。例えば、カラスク文化の短剣や刀子などの青銅器、青銅製の冑、鍔、そして鹿石である。

カラスク文化の短剣に類するものは、中国では西周

時代の北京昌平白浮や河北省興隆小河南村、甘粛省合水などで発見されている（北京市文物管理处 1976, 図九；興隆県文物管理所 1990；北京大学考古学系 1997, pl. 47）。南シベリアのミヌシンスク地方では約 30 点ほど発見され、アルタイ、トゥバ、西シベリア、カザフスタン、バシキリア、そしてウクライナでも発見例がある (Chlenova 1976; Chlenova 1988)。ウクライナでは残念ながら科学的な発掘例がないが、黒海沿岸の先スキタイ時代の銅柄鉄剣や鉄剣は、型式的にカラスク文化の短剣に出自するという説がある (Terenzhkin 1975)。また柄頭に熊のような動物が載り、鐔の部分に鳥頭紋様のある短剣がキエフから発見されているが (Terenzhkin 1961, Рис.90-3)、これはミヌシンスク地方でカラスク文化に後続するタガール文化初期のものかもしれない。

刀子では、例えば黒海の北のヴォロネジからまったくシベリア風の刀子が発見されている (Berezutskii 2002)。型式的には、南シベリアではタガール文化初期、中国北辺では西周末～春秋時代初め頃に編年されるような刀子である。カラスク文化の刀子は、北カフカスやドン川下流域、カム川下流域にも発見例があるという (Chlenova 1973, c.197)。

カラスク文化の装飾品は、キエフあたりでも発見例があるらしい (op. cit. c. 199)。

冑では、商代後期と考えられる山西省柳林県高紅の墓葬から青銅製で一鑄の冑が出土し、西周時代の北京昌平白浮、北京琉璃河からも出土している。同様のものは、青海省民和県やモンゴルからも発見される。また細部の少し異なるものが、夏家店上層文化の墓から数多く出土している。一方では、アルタイ、サマルカンド、キルギス、そして黒海東岸のスキタイ文化初期の墓から、よく似た青銅製一鑄の冑が出土する。これらは一連のものと考えられ、おそらく東方に起源を持つと思われる (高濱 1995, pp.343-344; Khudyakov 2001, Рис.1, 2)。

鍔はユーラシア草原地帯に広く分布する調理具である。その最も早いと考えられる例は、中国では北京延慶西撥子村から出土している。同じ型式の鍔は、中国北部や、ザバイカリエ、新疆ウイグル自治区、東カザフスタン、そして北カフカスからも出土している。延慶西撥子村出土の例は、伴出品により、おそらく西周時代後期、あるいは中期まで遡りうると考えられる。

一方、北カフカスのベシュタウ発見例は、先スキタイ期のノヴォチェルカスク期の遺物を伴っていた。東では前 9 世紀、西でも前 8 世紀まで遡り、東の方が幾分早い可能性がある (高濱 1995, pp.348-350)。

鹿石はモンゴルに最も多く発見される。しかし、鹿図像のない型式の鹿石は、さらに西方、新疆ウイグル自治区、ウラル、北カフカス、ブルガリアなどでも発見されている。モンゴルに多い典型的な鹿石には、腰帯から吊り下げられる形で武器などが刻まれていることが多く、中国北辺やシベリアの武器と対比させて、商代後期から春秋時代前期並行期の年代が考えられる。また北カフカスでは、先スキタイ時代の墳丘の上に見出された例がある (畠山 1992)。

ここで問題にした鏢の型式も、そのような現象の一つとして捉えることができるであろう。ただ、西ヨーロッパにまで分布しているものは、他に例がない。

次に問題になるのはその起源地である。中国北方に起源を持つのか、あるいはザバイカリエなどを含む東シベリア、あるいはさらに西方の西シベリア、黒海沿岸、中央・西ヨーロッパなのであろうか。ヒュッテルは、型式学的なつながりから、ヨーロッパ起源と考えている。上に挙げたカラスク文化の青銅器、冑、鍔、鹿石などは、東方が起源地であった可能性が高いと思われるが、この鏢に関しては、伴出品や遺跡の年代からは、今のところ確実な結論は得られない。

## 5

この型式の鏢に関して、東アジア考古学の立場から考慮しなければならない問題が、幾つかある。まずは、中国の青銅製の鏢との関係である。西周時代の青銅製の鏢の中には、この骨角製の鏢と極めて形の似たものがある。例えば宝鶏茹家荘 1 号墓 (図 40) (盧連成等 1988, 図版一七一-1)、竹園溝 1 号墓 (図 41) (同書, 図版六八-1)、洛陽北窯 310 号墓 (図 42) (洛陽市文物工作隊 1999, 図七九-3、図版四一-6)、張家坡 248 号墓 (図 43) (中国社会科学院考古研究所編著 1999, 図 167-7) などで出土している鏢である。おそらく類似は偶然ではなく、骨角製のものを青銅で模して作ったと考えるのが自然であろう。そうだとすると、次には西周時代に現れる他の型式の鏢との関係も、問題になるであろう。

また東部ザバイカリエ (図 44) (Grishin 1975,

Табл. XXI-8)、モンゴル(図 45～47)(Volkov 1967, Рис.15-11～13)などで発見される青銅製の鏃も、孔の数と方向からみれば、この型式の骨角製の鏃との関係が当然考えられる。さらには、中国遼寧省朝陽十二台営子 1 号墓出土の鏃は(図 48)(朱貴 1960, 図版三-27, 28)、モンゴル出土の青銅製鏃とよく似ているし、錦州烏金塘出土の「長条形飾」も(図 49)(錦州市博物館 1960, 図二-10, 図版二-3)、この種の鏃の一種と考えることが可能であろう。

しかしこれらの問題の検討は後日に期すことにして、今回はひとまずここで筆を擱きたい。

### 引用文献

高濱秀

1995 「西周・東周時代における中国北辺の文化」古代オリエンツ博物館編『文明学原論』pp.339-357.

崑山嶺

1992 「北アジアの鹿石」『古文化談叢』27.

吉林省文物考古研究所、四平市文物管理委員会弁公室、双遼市文物管理所、双遼市鄭家屯博物館

2009 「吉林双遼市后太平青銅時代墓地」『考古』2009-5, pp.36-48, pls.8-10

錦州市博物館

1960 「遼寧省錦西県烏金塘東周墓調査記」『考古』1960-5, pp.7-9, 図版 2

興隆県文物管理所 王峰

1990 「河北興隆県発現商周青銅器窖藏」『文物』1990-11, pp.57-58

朱貴

1960 「遼寧朝陽十二台営子青銅短劍墓」『考古学報』1960-1, pp.63-71, 図版 1-6

中国社会科学院考古研究所 編著

1999 『張家坡西周墓地』(中国田野考古報告集 考古学專刊 丁種第五七号), 中国大百科全書出版社. 図 247-1,2,3, 図版 193-2,3,4, 銅鏃 図 167-7, 図版 149-3

中国社会科学院考古研究所安陽工作隊

1979 「1969—1977 年殷墟西区墓葬発掘報告」『考古学報』1979-1, pp.27-146, Pls.1-20.

1984 「殷墟西区発現一座車馬坑」『考古』1984-6, pp.505-509, pl.3

德州地区文化局文物組、済陽県図書館

1985 「山東済陽劉台子西周墓地第二次発掘」『文物』1985-12, pp.15-20.

内蒙古自治区文物考古研究所・吉林大学边疆考古研究中心編著

2010 『林西井溝子一晚期青銅時代墓地的発掘與綜合研究』科学出版社。

内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 編著

2009 『小黒石溝—夏家店上層文化遺址発掘報告』科学出版社。

寧夏文物考古研究所

1995 「寧夏彭堡於家莊墓地」『考古学報』1995-1, pp.79-107, pls.13-18.

寧夏文物考古研究所、寧夏固原博物館

1993 「寧夏固原楊郎青銅文化墓地」『考古学報』1993-1, pp.13-55, pls.1-6.

北京市文物管理处

1976 「北京地区的又一重要考古收穫——昌平白浮西周木槨墓的新啓示」『考古』1976-4, pp.246-258, 228, pl.1-4  
北京市文物研究所

1995 『琉璃河西周燕国墓地 1973—1977』文物出版社。

2007 『軍都山墓地—玉皇廟』(一)～(四)、文物出版社。

北京大学考古学系 王占奎、甘肅省文物考古研究所 水涛

1997 「甘肅合水九站遺址発掘報告」北京大学考古系編『考古学研究(三)』pp.300-477, pls.9-48

北京大学考古学系商周組、山西省考古研究所 編著 鄒衡主編

2000 『天馬一曲村 1980—1989』科学出版社。

洛陽市文物工作隊

1999 『洛陽北窯西周墓』文物出版社。

羅豊、延世忠

1993 「1988 年固原出土的北方系青銅器」『考古與文物』1993-4, pp.17-21.

羅豊、韓孔樂

1990 「寧夏固原近年発現的北方系青銅器」『考古』1990-5, pp.403-418, pl.4-6.

李殿福

1991 「建平孤山子、榆樹林子青銅時代墓葬」『遼海文物學刊』1991-2, pp.1-9, 77, pl.1-4

劉士莪編著

2001 『老牛坡』西北大学考古專業田野発掘報告 陝西人民出版社。

Berezutskii, V. D.: Березуцкий, В. Д.

2002 Охранные раскопки курганов в Воронежской области. *Археологические открытия 2001 года.* сс.98-100.

Vokii, N. M. and Gorbun, G. P.: Бокый, Н. М., Горбул, Г. П.

1961 Могила киммерийского всадника у села Чечелиевка Кировоградской области. *Советская археология*, 1961-1, сс. 224-228.

Chlenova, N. L.: Членова, Н. Л.

1973 Карасукские находки на Урале и в Восточной Европе. *Советская археология.* 1973-2, сс.191-204.

1976 *Карасукские кинжалы.* Москва.

1988 Новый карасукский кинжал из Башкирии. *Краткие сообщения* 193, сс.98-100

1994 *Памятники конца эпохи бронзы в Западной Сибири.* Москва, Пушинский научный центр РАН,

- Dikov, N. N.: Диков, Н. Н.  
1958 *Бронзовый век Забайкалья*. Улан-Удэ.
- Grishin, Yu. S.: Гришин, Ю. С.  
1975 *Бронзовый и ранний железный века Восточного Забайкалья*. Москва.
- Heine-Geldern, R.  
1951 *Das Tocharerproblem und die Pontische Wanderung. Saeculum*. 2.
- Hüttel, Hans-Georg  
1979 Zur westlichen Komponente des chinesischen Pferd-Wagen-Komplexes der Shang- und frühen Chou-Zeit. *Beiträge zur allgemeinen und vergleichenden Archäologie*. Deutsches Archaeologisches Institut. Band 1, SS.1-29.  
1981 *Bronzezeitliche Trensen in Mittel- und Osteuropa. Grundzüge ihrer Entwicklung*. Prähistorische Bronzefunde. Abteilung XVI • Band 2. München
- Khudyakov et al.: Худяков, Ю. С., Табалдиев, К. Ш., Солтобаев, О.А.  
2001 Шлемы, найденные на территории Кыргызстана. *Археология, этнография и антропология Евразии*. 1(5), сс.101-106.
- Kрупнов, Е. И.: Крупнов, Е. И.  
1960 *Древняя история Северного Кавказа*. Москва
- Matyushchenko, Igoľ'nikova: Матющенко, В. И., Игольникова, Л. Г.  
1969 Поселение Еловка –памятник второго этапа бронзового века Средней Оби. В кн: *Сибирский археологический сборник*. Новосибирск. сс.183-195.
- Melyukova, A. I.: Мелюкова, А. И.  
1979 *Скифия и Фракийский мир*. Москва.
- Mozsolics, A.  
1953 Mors en bois de cerf sur le territoire du bassin des Carpathes. pp.69-111, pls.XIV-XV, *Acta Archaeologica Academiae Scientiarum Hungaricae*. Т. III, 1-4.
- Savinov, D. G.: Савинов, Д. Г.  
1996 *Древние поселения Хакасии. Торгажак*. Санкт-Петербург.
- Smirnov, K. F.: Смирнов, К. Ф.  
1961 Археологические данные о древних всадниках Поволжско-Уральских степей. *Советская археология*, 1961-1, сс.46-72.
- Sprishevskii, V. I.: Спришевский, В. И.  
1958 Чустское поселение эпохи бронзы (раскопки 1955 г.). *Краткие сообщения Института истории материальной культуры*, Вып. 71, сс. 86-98.
- Terenozhkin, A. I.: Тереножкин, А. И.  
1961 *Предскифский период на Днепровском Правобережье*. Киев.  
1971 Дата Мингечаурских удил. *Советская археология*, 1971-4, сс.71-84.
- 1975 Киммерийские мечи и кинжалы. В кн: *Скифский мир*. сс.3-34.
- 1976 *Киммерийцы*. Киев.
- Tsybiktarov, A. D.: Цыбиктаров, А. Д.  
1998 *К ультура плиточных могил Монголии и Забайкалья*. Улан-Удэ.
- Val'chak, S. B. : Вальчак, С. Б.  
2009 *Конское снаряжение в первой трети I-го тыс. до н. э. на юге Восточной Европы*. Российская академия наук, Институт археологии. Москва.
- Volkov, V. V.: Волков, В. В.  
1967 *Бронзовый и ранний железный век Северной Монголии*. Улан-батор.
- Zadneprovskii, Yu. A.: Заднепровский, Ю. А.  
1962 *Древнеземледельческая культура Ферганы*. МИА 118. Рис.15. с.35.



图 1. 琉璃河 M105 出土



图 2. 琉璃河 M53 出土

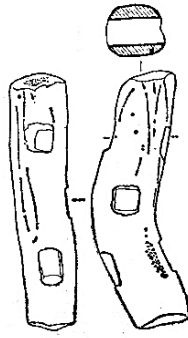


图 3. 昌平白浮出土

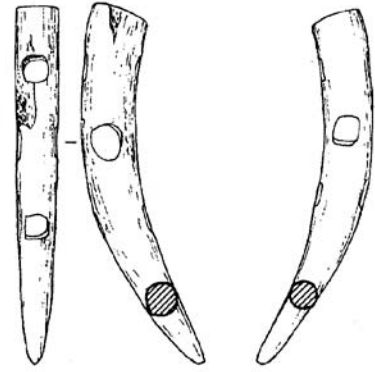


图 4. 天馬曲村 6130 号墓出土



图 5. 天馬曲村 6130 号墓出土



图 6. 洛陽北窯出土

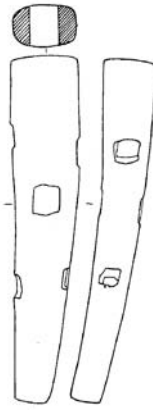


图 7. 張家坡 M165 出土

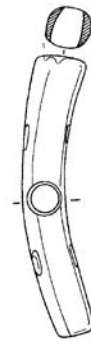


图 8. 張家坡 M284 出土



图 9. 濟陽劉台子出土

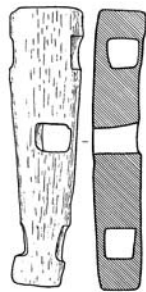


图 10. 赤峰小黑石溝  
92NDXA II M11 出土

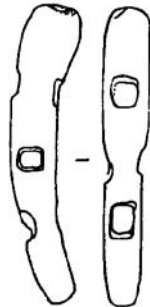


图 11. 建平孤山子  
大拉罕溝出土

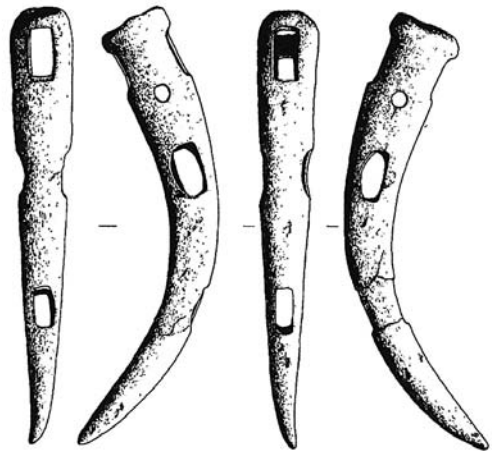


图 12. 双遼后太平 26 号墓出土

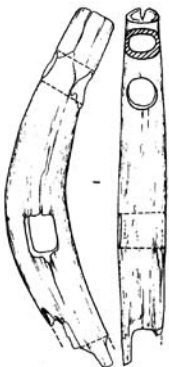


图 13. 井溝子 M21



图 14. Sotnikovo 15 出土

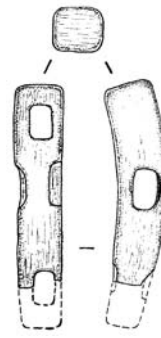


图 15. Tapkhar 69 出土

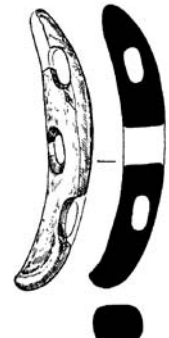


图 16. Torgazhak 出土

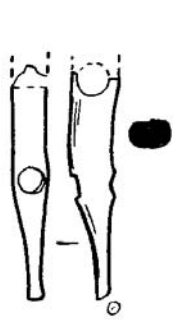


図 17. Elovka 出土



図 18. Elovka 出土



図 19. Bol'shoi Log 出土

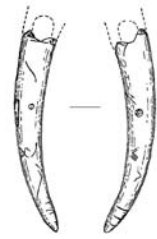


図 20. Postnikov 出土



図 21. Chust 出土

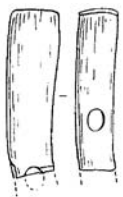


図 22. Chust 出土



図 23. Dal'verzin 出土

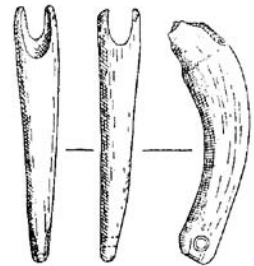


図 24. Subotovo  
ゴロディシチェ出土

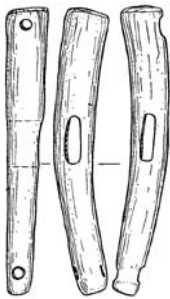


図 25. Subotovo 出土

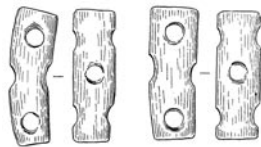


図 26. Chechelievka 出土

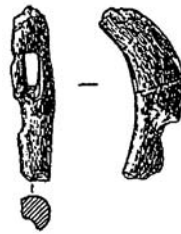


図 27. Gordeevka 出土

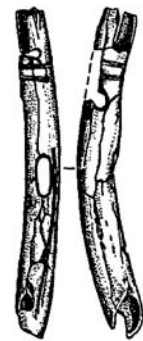


図 28. Chuyuncha 出土

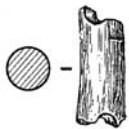


図 29. Zmeiskoe 出土



図 30. Asenovets 出土

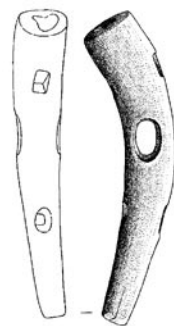


図 31. Saghegy 出土



図 32. Mörigen 出土

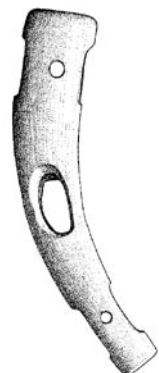


図 33. Heathery  
Burn Cave 出土

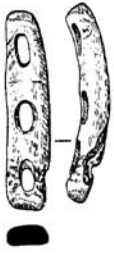


図 34. Torgazhak 出土

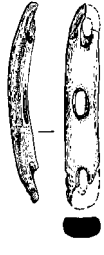


図 35. Torgazhak 出土

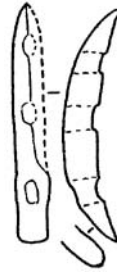


図 36. Elovka 出土



図 37. 赤峰小黒石溝  
92NDXA II M11 出土

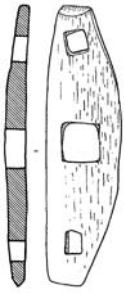


図 38. 赤峰小黒石溝  
92NDXA II M11 出土



図 39. 建平孤山子  
大拉罕溝出土



図 40. 茹家荘 1号墓出土



図 41. 竹園溝 1号墓出土



図 42. 洛陽北窯出土



図 43. 張家坡出土



図 44. 東ザバイカリエ出土



図 45. オブス・アイマク出土



図 46. オブス・アイマク  
出土



図 47. アルハンガイ・  
アイマク出土

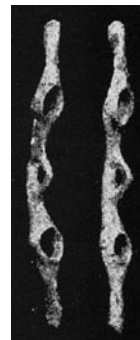


図 48. 十二台営子 1号墓出土



図 49. 錦州烏金塘出土